

1万6500ト_ンが地域からなくなっていた。その意味は大きい」と大型酪農が果たす役割も自負する。小椋社長自身、50代で一度は酪農をやめようと思ったが、11年前に法人化し、しばらくは自ら搾乳も治療も牧草収穫もこなし、苦勞して現在を築き上げた。

道内乳量35% 生産を下支え

酪農情報紙「酪農スピードニュース」によると、昨年度の道内の牧場別乳量では、上位10のうち8つが十勝管内。昨年から全道の乳量が落ち込む中、大型化の進行が十勝の前年並み維持の要因となっている。ホクレンを離脱した田口畜産(幕別町)も21位と、十勝の酪農を支えた。

同法人会の乳量は33戸で十勝の1割以上を占め、道の調べでも、年間乳量1000ト_ン以上の大規模酪農家が道内乳量の35%(2012年)を支える。

同法人会は税抜きで乳価5円以上の値上げが実現しな

ければ、飼料高騰などでコスト増となるため、無理に増産の求めに応じない可能性も示唆したが、踏みとどまった。今後も法人会独自の要望活動は続ける方針で、酪農を取り巻く環境が悪化すれば、ホクレンなどJA系統組織と酪農家、大規模・小規模の酪農家間の溝が深まりかねない。

今後、大型酪農が現在の一元集荷を維持し、制度をより良くしていくには、大型酪農、家族経営と、ホクレンなどのJA系統団体が協力して危機を乗り切る体制が求められている。

＜メガファーム＞

明確な定義はないが、年間生乳生産量3000ト_ン、経産牛300頭以上の経営規模とされる。同1000ト_ン以上をメガファームと呼ぶ場合もあり、酪農スピードニュースによると、道内では全体の12.3%に当たる760戸、十勝はその4割近い286戸となっている。